



昼食

店舗と卵の写真とキャプション

店舗) 卵道二号店。駅から徒歩1分ほどにある。
卵) 定番・だしまき定食。

奥多摩の隠れた名物、奥多摩駅のすぐそばにある「卵道(ランウェイ)」のだし巻き卵。多摩川の清水と青梅産のこだわり卵を使用した「だしまき定食(1,100円)」が、看板メニューだ。さっぱりしつとも濃厚なだしの効いた卵焼きに醤油をかけ、ご飯といただく。シンプルな定食だが味よし、量よしで満足感がある。奥多摩を訪れた際はぜひ寄ってほしい。

日原鍾乳洞



麦山の浮橋

奥多摩湖の湖上に浮かぶ麦山の浮橋(ドラム缶橋)。奥多摩駅からバスに揺られること約30分、小河内神社にて下車すると、浮きの鮮やかな朱色に目を奪われる。かつてこの浮きの役割をドラム缶が果たしていたことが、別名ドラム缶橋たる所以だろう。深緑の山々に縁取られる湖面の青と朱とのコントラストが趣深く、眺めている内にしつとりと癒される。さて、いざ渡ろうとすると遠目から見た時の落ち着いた印象とは一転、これがなかなか揺れる。はじめは驚くが、慣れてくるとアトラクションのようで楽しい。渡りきる頃には足取りも軽く、さながら水蜘蛛の術を使う忍者になった気分であった。そんな2つの顔を合わせ持つ茶目つけあふれる橋を、私はきつとまた眺め、渡る。

日原鍾乳洞は「ここは東京なのか!？」と感じるほど神秘的な場所だった。都会の忙しい生活に少し疲れたという方には、ぜひ一度足を運んでいただきたい。年間を通じて11℃という洞内は、入った瞬間夏の暑さを忘れられるひんやりとした最高の空間が広がっていた。数十万年の歳月をかけて自然が生み出した急勾配で入り組んだ道はハラハラドキドキがいつばいだ。そんな日原鍾乳洞は、カップルで行ったら心の距離が縮まること間違いなし!(笑) 奥多摩駅から直通のバスもあるため、アクセスも良好だ。



都会の大学生たちは限界を迎えていた。試験というストレスから解放され、喜び勇んで遊びに出かければ連日の猛暑で体力が削られていく毎日。どこでもいい、涼しいところに行きたい……。思い至ったのは東京の秘境、奥多摩。山に囲まれ、水流量かなその地は、東京都とは言い都会のイメージからあまりにかけ離れていた。数十万年という時が生み出した鍾乳洞の神秘的な景観。落ち着いた見た目とは裏腹に、アスレチックよろしく揺れるドラム缶橋。一口食べればおいしさがランウェイを駆け抜けていくだし巻き卵。東京の新たな一面を知った大学生たちは感動し、癒されていた。帰り際、彼らは思った。「奥多摩、サイコーじゃん」

時刻	スケジュール
10:18	奥多摩駅を出発
10:44	小河内神社(バス停)に到着 麦山の浮橋、小河内神社を散策
11:54	小河内神社(バス停)を出発
12:22	奥多摩駅に到着 「卵道」にて昼食
14:05	奥多摩駅を出発
14:36	鍾乳洞(バス停)に到着 鍾乳洞を回る
16:11	鍾乳洞(バス停)を出発
16:42	奥多摩駅に到着、現地解散



奥多摩湖

奥多摩駅を出てトンネルとカーブが続く狭い山道のなか、20分ほど路線バスに揺られると、見上げていた小河内ダムの先に湖面が開けてくる。バスを降りると、曇天のためか夏場ながら肌寒いほどであったが、湖を囲む霧がかつた山がその深緑を静かに映し込んでおり、独特の風情を醸し出していた。見晴らしの良い場所にベンチが設置されており、自然を全身で浴びながらゆったりと過ごすことができる。東京にいながら都会の雑多を逃れ、時間を忘れた休息を味わうには最高の場所であった。



奥多摩駅

「それは首都・東京というにはあまりにも自然豊かすぎた……。」
奥多摩駅を降りて僕はいの一番にそう感じた。いや、そう感じるのには十分すぎるほどの光景が広がっていたというべきだろうか。周りには高々とそびえ、霧がかつた山々。都会では親の顔以上に見たであろうドラッグストアやコンビニはなく、あるのは観光案内所と数軒の飲食店。そんな自然豊かで静かな光景を前に、都会に揉まれ続けた体に染みついていた何か良くないモノが浄化されていくような感覚すらした。都心から約2時間。電車で揺られるだけでこんなにも非日常な空間に飛び込めることに驚きを感じたと同時に、無意識的に興奮で胸が高まった。「さすが奥多摩、秘境と呼ばれるだけのことはある。」